

# 男女大学生にみる医療10科に対する「痛み」, 「大切さ」 および「身近さ」イメージについての一考察

渡邊貢次\* 高橋裕子\*\* 森田一三\*\*\*  
坪井信二\*\*\* 中垣晴男\*\*\* 榊原康人<sup>1</sup>

\* 養護教育講座

\*\* 保健体育講座

\*\*\* 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座

## Social Images of “Pain”, “Importance” and “Accessibility” on 10 Medical Disciplines in University Students

Koji WATANABE\*, Yuko TAKAHASHI\*\*, Ichizo MORITA\*\*\*,  
Sinji TSUBOI\*\*\*, Haruo NAKAGAKI\*\*\*, and Yasuto SAKAKIBARA<sup>1</sup>

\* Department of Nursing and Health Education/

\*\* Department of Health and Physical Education,

Aichi University of Education, Kariya, Aichi 448-8542 Japan

\*\*\* Department of Preventive Dentistry and Dental Public Health,

School of Dentistry, Aichi-Gakuin University, Nagoya 464-8650 Japan

### I はじめに

高齢化社会の到来が述べられて既に久しい。高齢者のQuality of life (QOL) は高齢化社会の大きな課題とされているが、このことは、特定の階層だけではなく、若年層から高齢者に至るまで各世代の日常生活の中でのQOLの確立の有無が問われていることである<sup>1)</sup>。筆者ら<sup>2)-4)</sup>はこれまでも大学生・社会人の健康意識・行動に関する調査を行った結果から、低年齢時には適切な生活習慣確立のための知識や技術の理解と実践をめざすこと、そして青年期の健康再教育の必要性について報告してきた。これらの実現が望ましい健康観の構築、そして健康意識・行動(ヘルスプロモーション)に結びつき、成人・高齢化にむかっのQOLの充実に結びついていくことを提案してきた。

自身の健康意識・行動に反映され、ヘルスプロモーションへの態度を表現しているものの一つとして医療各科へのイメージ(印象)があげられる<sup>5)</sup>。そして、中垣らは、医療10科に対するイメージを「痛み」、「大切さ」、「身近さ」という3つの要素から評価する調査項目を採り入れ、主に社会人を対象として、各人の受療行動・意識等の分析に活用している。

そこで今回、愛知教育大学(以下、本学)の男女大学生を対象に医療各科のイメージについて調査を行い、男女大学生間の意識差やイメージの特性等についてまとめた。

なお、本稿は筆者らと台湾研究者らとの共同による日本および台湾の男女大学生を対象とした健康にかかわる調査研究の一部をまとめたものである。調査内容としてはこれ以外に健康意識・行動(MOS SF-20)<sup>6)</sup>、歯科保健行動<sup>7)</sup>、生活習慣、歯科衛生士・言語療法士の認知度等が含まれている。これらの分析については別の報告とする。

### II 研究方法

#### 1. 調査対象者と調査期間

本学の1~4年生の男女大学生を対象とし、できるだけ各課程から広く選ぶことを心がけた。また、調査内容の性質上、医療や健康にかかわる授業科目や実習科目(学内外含めて)が多いと考えられる養護教諭養成課程、障害児教育教員養成課程の学生は調査対象から除いた。2005年5月末~7月上旬に、調査担当者が授業時に調査の目的を説明した後、調査用紙を配布し、回答者がその場で記入後回収した。回収した調査用紙のうち、性別、年齢の記述のないものは除き、最終的には男子大学生306名(平均年齢19.7±1.3歳)、女子大学生411名(平均年齢19.4±1.2歳)、合計717名を有効回答とし分析した。

1 愛知学院大学歯学研究科大学院生(Graduate Student, Department of Preventive Dentistry and Dental Public Health, School of Dentistry)

## 2. 調査内容

### 1) 健康状態

回答者の健康状態を、5:大変よい、4:ややよい、3:よい、2:ややよくない、1:よくないの5段階評価で尋ねた。また、そのまま回答者の健康スコア(5~1点)として点数化した。

### 2) 医療10科への「痛み」、「大切さ」および「身近さ」のイメージ

医療各科のうち「内科」、「外科」、「整形外科」、「精神科」、「産婦人科」、「小児科」、「耳鼻咽喉科」、「眼科」、「皮膚科」および「歯科」の10科に対して、回答者が持っている「痛み」、「大切さ」、「身近さ」のイメージ(印象)について尋ねた。回答のためのイメージ評価は、「痛み」については、5:非常に痛い、4:やや痛い、3:ふつう、2:あまり痛くない、1:全く痛くないの5段階である。同様に、「大切さ」、「身近さ」もそれぞれ、5:非常に〇〇である~1:全く〇〇でないの5段階評価である。また、そのまま各項目における回答者のイメージスコア(5~1点)として点数化した。

## 3. 分析

回答結果の集計および分析にはSPSS11.0J for Windowsを使用した。

### 1) 健康状態および医療10科イメージの男女間の比較

健康状態の男女分布差は $\chi^2$ 検定を用い、男女間の各科イメージスコア平均値比較にはMann-Whitney U検定を用いた。また、健康スコアとイメージスコアの関連性はSpearman順位相関を用いた。有意差の判定は5%および1%水準とした。

### 2) 階層クラスター分析

回答者が感じている医療10科への類縁性(近さ)を検討するために、各科の「痛み」、「大切さ」、「身近さ」について、それぞれ5:非常に を選択した者の割合をもとにクラスター分析(ward法)を行った。

## Ⅲ 結果

### 1. 健康状態

表1は、各自が評価している健康状態を選択肢度数で示したものである。大変よい は男子の方が多い割合を示したが、大変よい+ややよい+よい の合計で

は、男子のおよそ80%に対して、女子はおよそ85%が選択し、女子の方が健康状態ではやや良好という自己判断を示していた。また、男女間分布には有意差が見られた。

### 2. 医療各科へのイメージの男女間比較

男女大学生が内科、外科、整形外科、精神科、産婦人科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科および歯科の医療10科に対して持っている「痛み」、「大切さ」、「身近さ」のイメージを、イメージスコアの平均値をもとに比較した。その結果を表2に示す。

#### 1) 「痛み」のイメージ

男女間で有意差がみられたのは、内科、外科、精神科、小児科、耳鼻咽喉科、歯科の6科であった。この6科いずれも女子の方がスコア平均値は高く、痛みの印象を男子よりは強く持っていた。また、男女とも外科、産婦人科、歯科に高スコアを示した。

全体を総じてのスコア平均値では、男子3.08、女子3.21となり、男女間で有意差がみられた。

#### 2) 「大切さ」のイメージ

産婦人科、眼科、歯科の3科を除いた7科で、男女間の有意差がみられた。各科の平均スコアは、男子は3.74~4.41、女子は3.51~4.26となり、全体的に高スコアを示した。また、産婦人科を除いて他の9科において男子の方が女子より高スコアを示した。

全体を総じてのスコア平均値では、男子4.06、女子3.90となり、男女間で有意差がみられた。また、3要素の中では、最も高い平均値を示した。

#### 3) 「身近さ」のイメージ

男女間で有意差がみられたのは、外科、整形外科、産婦人科、眼科、皮膚科、歯科の6科であった。このうち、外科、整形外科は男子の方が高スコアであり、他の4科は女子が高スコアを示した。全体的にも男女間で評価が分かれた。

全体を総じてのスコア平均値では、男子2.95、女子3.01とな、男女間で有意差はみられなかった。

### 3. 健康状態と「痛み」、「大切さ」、「身近さ」との関連性

健康状態(健康スコア)と、「痛み」、「大切さ」、「身近さ」(イメージスコア)との関連性を検討した。その結果を表3に示す。男女とも「痛み」と相関がみられ、また、女子では「身近さ」とも相関がみられた。

表1 健康状態 [問. 概して、あなたの健康は、]

	男子大学生	女子大学生	計	$\chi^2$ 検定
5: 大変よい	72 (23.6)	72 (17.6)	144	$\chi^2=12.26$ df=4 p<0.05
4: ややよい	82 (26.9)	131 (32.0)	213	
3: よい	96 (31.4)	148 (36.0)	244	
2: ややよくない	42 (13.8)	54 (13.2)	96	
1: よくない	13 (4.3)	5 (1.2)	18	
計	305 (100.0)	410 (100.0)	715	

数値は回答数(%)。無回答は除く

すなわち、健康状態がよいと自己判断しているものほど、「痛み」や「身近さ」について そうであると感じているものが多いということになる。

4. イメージからみた医療各科間の類縁性

男女大学生が感じている各科それぞれの類縁性をク

表2 「痛み」、「大切さ」、「身近さ」のイメージスコア 平均値と男女間比較

(1)痛み			
	男子大学生	女子大学生	有意差
内科	2.46 ± 1.17	2.71 ± 1.11	**
外科	3.82 ± 1.17	4.09 ± 0.95	**
整形外科	3.59 ± 1.15	3.71 ± 1.06	-
精神科	2.09 ± 1.31	2.24 ± 1.23	*
産婦人科	4.05 ± 1.23	4.05 ± 1.04	-
小児科	2.77 ± 1.11	2.97 ± 0.96	*
耳鼻咽喉科	3.04 ± 1.20	3.27 ± 1.07	*
眼科	2.54 ± 1.15	2.46 ± 1.06	-
皮膚科	2.93 ± 1.15	2.82 ± 1.11	-
歯科	3.82 ± 1.16	4.04 ± 0.93	*
合計	3.08 ± 0.72	3.21 ± 0.57	*

(2)大切さ			
	男子大学生	女子大学生	有意差
内科	4.41 ± 0.95	4.26 ± 0.91	**
外科	4.30 ± 1.05	4.05 ± 1.08	**
整形外科	3.77 ± 1.27	3.51 ± 1.19	**
精神科	3.96 ± 1.22	3.68 ± 1.26	**
産婦人科	3.74 ± 1.57	3.95 ± 1.27	-
小児科	3.79 ± 1.47	3.61 ± 1.38	*
耳鼻咽喉科	4.10 ± 1.05	3.79 ± 1.12	**
眼科	4.33 ± 0.94	4.23 ± 0.92	-
皮膚科	3.97 ± 1.16	3.85 ± 1.07	*
歯科	4.19 ± 0.97	4.13 ± 0.92	-
合計	4.06 ± 0.93	3.90 ± 0.85	*

(3)痛み			
	男子大学生	女子大学生	有意差
内科	3.88 ± 1.15	3.95 ± 1.00	-
外科	3.26 ± 1.23	2.98 ± 1.13	**
整形外科	2.93 ± 1.42	2.54 ± 1.27	**
精神科	1.79 ± 1.04	1.72 ± 0.95	-
産婦人科	1.79 ± 1.17	2.35 ± 1.18	**
小児科	2.43 ± 1.36	2.49 ± 1.21	-
耳鼻咽喉科	3.32 ± 1.21	3.21 ± 1.23	-
眼科	3.67 ± 1.18	3.94 ± 1.09	**
皮膚科	2.85 ± 1.24	3.17 ± 1.22	**
歯科	3.57 ± 1.21	3.78 ± 1.06	*
合計	2.95 ± 0.75	3.01 ± 0.59	-

数値は、平均値 ± SD.  
男女間有意差は、Mann-Whitney U 検定  
-:NS, \*:p<0.05, \*\*:p<0.01

表3 健康状態（健康スコア）と「痛み」、「大切さ」、「身近さ」（イメージスコア）との関連性

	健康状態			
	男子大学生		女子大学生	
	相関係数	有意差	相関係数	有意差
痛み	0.143	*	0.114	*
大切さ	-0.052	-	-0.034	-
身近さ	-0.027	-	0.097	*

有意差は、Spearmanの順位相関検定 -:NS, \*:p<0.05

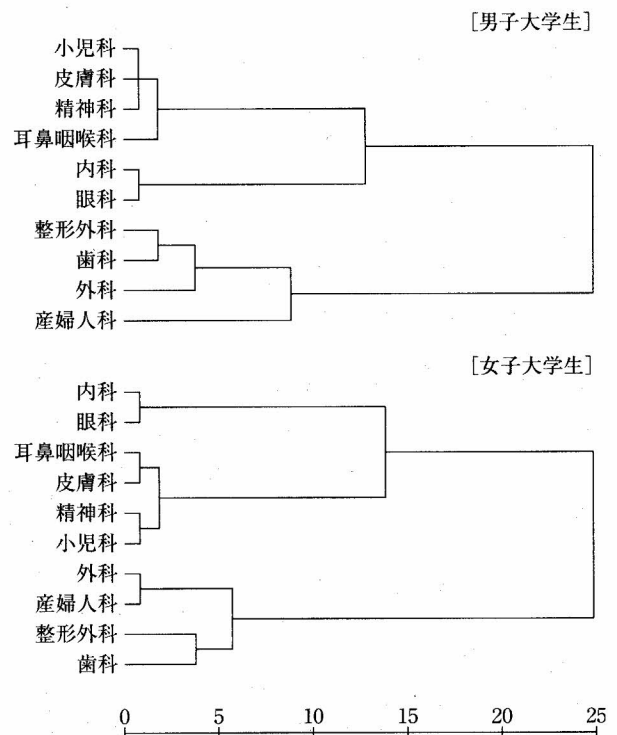
ラスター分析により検討した。図1はその関係をデンドログラムで示したものである。

男女とも共通して大きく3つのグループに分けられた。すなわち、内科・眼科グループ、精神科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚科グループ、外科・整形外科・産婦人科・歯科グループである。また、併合のパターンも同様であった。すなわち、前二者の内科・眼科グループおよび精神科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚科グループはグループ内でお互いに早い段階で併合があり、やがて前二者同士が併合する。最後に、後者の外科・整形外科・産婦人科・歯科グループと併合するというパターンである。

IV 考察

健康観の構築や健康意識・行動を反映していると思われるものの一つとして医療各科へのイメージ(印象)があげられる。知識からの社会的評価、自身の治療経験があったり周りに治療経験者がいたりすることが、その科のイメージ形成に影響することが予想される。しかし、診療分野である各科に対するイメージ分析の報告は少ない。國崎<sup>8)</sup>は、SD法を用いて歯科における社会的イメージ形成を調べたところ、情感(好き・嫌い)、評論(誠実・不誠実)、力動(あつい・冷たい)の3因子から成り立っていると述べている。Kimata<sup>9)</sup>は社会人・学生を対象として医療10科に対するイメージを自由なことばで表現してもらったところ、ネガティブイメージが多く、それには、性別、年齢、治療経験によりネガティブの内容(主観的・客観的・

図1 医療10科イメージによる男女別デンドログラム



精神的・行動的など) が表れるとしている。

一方、医療10科のそれぞれに対する「痛み」、「大切さ」、「身近さ」のイメージ調査としては、Nighiaら<sup>10)</sup>による、ハノイ市内と名古屋市内の男女大学生を対象とした先行研究がある。10科全体のスコア平均値でみると、Nighiaらによる名古屋市内の学生の調査では、「痛み」、「身近さ」では女子の方が高い値(“5:非常に”側にシフトの評価)を示したが、「大切さ」は男子の方が高い値を示したと報告している。今回の本学学生の調査においてもNighiaらのパターンと同じく、10科全体の「痛み」および「身近さ」のスコア平均値では女子の方がそれぞれ0.13、0.06ポイント高く、「大切さ」のスコア平均値では男子の方が0.16ポイント高い値を示した。

「大切さ」はどちらかといえば社会的評価、「痛み」や「身近さ」はどちらかといえば経験的評価がイメージに大きく働いていると考えられる。この意味では、女子のほうがより経験的受診行動による評価(判断)を伴っていたのではないかと考えられる。

ところで、今回の本学学生データがどの程度一般化できるのかを、Nighiaら<sup>10)</sup>による名古屋市内大学生の各科イメージスコアの平均値データと比較してみた。ただしNighiaらの各科のイメージスコアは男女合わせた数値なので、本学学生も同様処理した。それを参考図として図2に示した。両者のスコアパターンはほとんど一致しているのがわかる。したがって、各科個々に対してはスコアに若干の違いはあるもの、全体的にこのパターンは現在の大学生のイメージスコアを反映しているといってもよいのではないかと考えられる。

男女大学生の健康状態が「痛み」、「大切さ」、「身近さ」のイメージと関連があるのか検討したが、「大切さ」については関連がみられなかった。これは別の見方をすれば、社会的評価の要素が大きいともいえる「大切さ」については自分の健康状態に関係なく重要な位置づけに評価しているものといえる。すなわち、男女とも最も高い平均値で示されている。また、経験的評価が大きいと考えられる「痛み」や「身近さ」については、健康状態がこれらの評価に反映し、男女とも健康状態と「痛み」で、さらに女子では健康状態と「身近さ」との間で相関が認められたものと考えられる。ただ、相関係数そのものはそれほど大きくないため、両者の関連性を強く主張できるとまではいえず、今回は傾向が認められたという程度にとどめておきたい。

さて、Kimataら<sup>9)</sup>は10科に対して対応分析を行ったところ、職業的に医療と関係のない人々にとって、眼科と皮膚科、外科と整形外科、歯科と内科に近いイメージとしてとらえられていると述べている。一方、福澤ら<sup>11)</sup>は、地域住民を対象とした医療10科のイメ

ージ調査で、5:非常に痛い、5:非常に大切である、5:非常に身近である と評価した者の割合を求め、各科に対して感じている近さを男女別、世代別にクラスター分析により検討した。その結果、Kimataらとほぼ同様の類縁結果を認めた。そして、イメージ形成には受診経験やその日数などの行動が大きいと述べている。

今回の調査では、大学生の類縁性は、男女いずれも内科・眼科グループ、精神科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚科グループ、外科・整形外科・産婦人科・歯科グループに分けられた。これは、Kimataらや福澤らの主に社会人・住民を対象とした類縁性パターンとは必ずしも一致していない。その理由として、本調査は20歳前後の男女大学生を対象としており、やはり社会人との受診行動の差が大きく影響しているものと思われる。社会人(あるいは職業人)となれば多様な疾病、障害等に対する検診・健診機会の複数化・多様化、

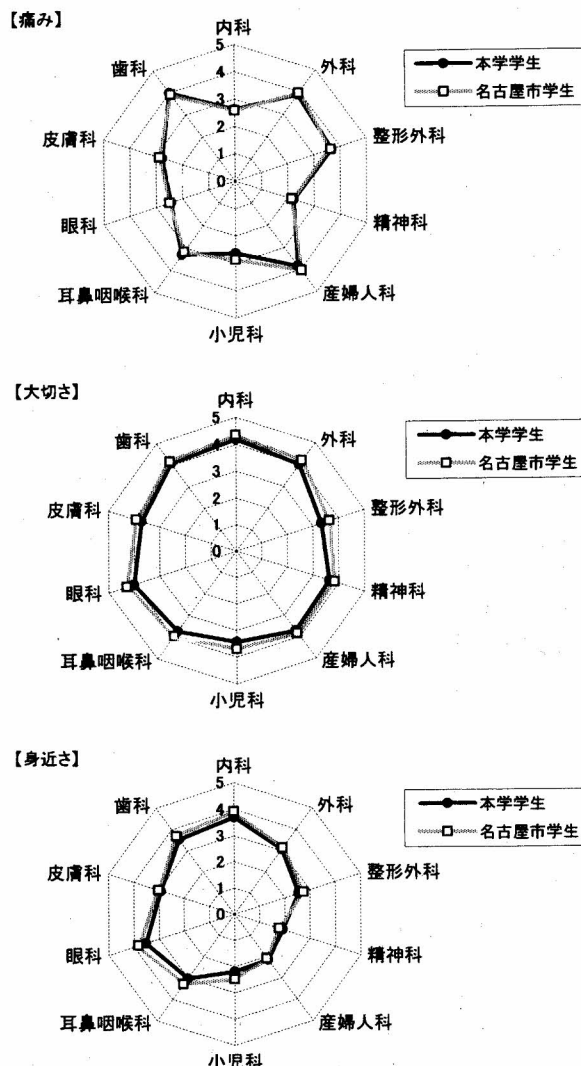


図2 本学学生および名古屋市学生の各科イメージスコア平均値比較(参考図)  
注:名古屋市学生は文献10)のデータをもとに筆者らが作成

女性では妊娠出産、育児等の検診・健診機会などが各科へのイメージ形成に關与する。

しかし、大学生は多項目にわたっての健診の機会が多いとはいえない。その結果、予防的受診行動よりも治療経験的な受診行動によるイメージ形成となり、社会人とは異なるパターンとなって表現されたものといえる。さらには、まだ未就業であり、ある意味では均一的な学生集団であることが、男女とも同様の内科・眼科グループ、精神科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚科グループ、外科・整形外科・産婦人科・歯科グループの3グループパターンとなって表れたものと考えられる。

個別的な特徴としては、後者の外科・整形外科・産婦人科・歯科グループにおいて、グループ内での併合に男女で若干の差がみられた。特に産婦人科については男女間で異なった。男子では、産婦人科はグループ内最後の併合、すなわち少し遠い位置づけであるのに対し、女子では産婦人科はまず外科と併合した。女子にとって産婦人科は外科的要素のある身近な存在と判断されていた。

今回は、一部の対象者における歯科検診を除いて、受診・治療行動の実情や疾患調査は行われていない。医療各科へのイメージの形成には教育・情報量の差、受診経験が大きく影響していくと考えられる。したがって今後は、受診・治療行動等を含めた調査がより必要になると考えている。

## V 要約

愛知教育大学の男子大学生306名、女子大学生411名(合計717名)を対象とし、自覚的健康と医療10科のイメージ(印象)についての調査を行った。その結果、次のようにまとめられた。

1) 健康状態を「大変よい+ややよい+よい」の合計で見ると、男子約80%、女子約85%となり、女子の方が健康状態ではやや良好という自己判断を示していた。

2) 「痛み」のイメージでは、内科、外科、精神科、小児科、耳鼻咽喉科、歯科の6科で男女間に有意差がみられた。6科いずれも女子の方がスコア平均値は高かった。「大切さ」のイメージでは、内科、外科、整形外科、精神科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科の7科で男女間に有意差がみられた。産婦人科を除いた9科において男子の方が高スコアを示した。「身近さ」のイメージでは、外科、整形外科、産婦人科、眼科、皮膚科、歯科の6科で男女間に有意差がみられた。評価については男女間で分かれた。

3) 健康状態と、イメージとの関連性では、男女とも「痛み」と相関がみられ、また、女子では「身近さ」とも相関がみられた。

4) イメージからみた医療10科間の類縁性を検討した。男女とも共通して大きく3つのグループに分けられた。①内科・眼科グループ、②精神科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚科グループ、③外科・整形外科・産婦人科・歯科グループである。

全体より、イメージの形成は受診経験が大きく影響しているのではないかと推察した。

謝辞：本研究遂行にあたって、ご協力をいただいた教員と学生のみなさんに感謝申し上げます。

## VI 参考文献

- 1) 健康日本21企画検討委員会：健康日本21(21世紀における国民健康づくり運動について)。健康・体力づくり事業財団、東京:2000
- 2) 渡邊貢次、鈴木千春、鈴木一吉：女子大学生の歯科保健行動についての意識調査—小学生低学年時～大学生時(現在の比較)―、日本教育保健研究会年報、6:29-36、1999
- 3) 渡邊貢次、鈴木千春、渡邊真弓、他：男女大学生の小学生時から大学生(現在時)の生活習慣、栄養摂取および歯科保健行動に関する調査研究、愛知教育大学研究報告、49:79-86、2000
- 4) 坪井信二、森田一三、中垣晴男、他：産業従業者への専門的口腔清掃による介入と健康度の改善効果に関する研究、産衛誌、45:222-234、2003
- 5) 中垣晴男：高齢化社会における歯や口腔への健康の方法論的視点。愛知学院大学歯学会誌、29:239-244、1991
- 6) McDowell I and Newell C: Mearnsurig Health. A guide to rating scales and questionnaires(2nd ed.), Oxford University Press:456-460、1996
- 7) 森田一三、中垣晴男、外山敦史、他：住民の8020達成のための市長村「健康づくり得点」の作成、日本公衛誌、47:421-429、2000
- 8) 國崎拓：“歯科治療”に対する社会的イメージの研究。口腔衛生会誌、41:158-174、1991
- 9) Kimata N, Nakagaki H, Ishino M et al.: Social images of medicine and dentistry in Japan. An exploratory study using correspondence analysis. International Dental Journal, 50:257-261、2000
- 10) Nghia LL, Nakagaki H, Morita I et al.: Social images of medicine and dentistry in university students of Hanoi, Vietnam and Nagoya, Japan. Aichi-Gakuin Dent Sci, 16:19-25、2003
- 11) 福澤歌織、中垣晴男、森田一三、他：住民の医療・歯科に対する社会的イメージの世代差および男女差。口腔衛生会誌、54:347、2004

(平成17年9月13日受理)